

中岡成文『試練と成熟——自己変容の哲学』

大阪大学出版会、二〇一二年

檉 本 直 樹

はじめに

著者から本書を献本していただき、後日、そのお礼をお伝えしたとき、「はじめて自分から書きたいと思って書いた本なんだ」と仰っていた。それだけ思い入れの強い本であるし、私自身、学生時代からご指導いただいていることもあるので、ちゃんとした書評を書かねばと思って読んでみたが、読み終えた印象は、とても難しく、正直よくわからないというものだった。

次々に出てくるさまざま事例やたとえが議論とどうつながっているのかがつかみにくく、本人も言及している通り、捉えどころがない。しかしながら対照的に、二度、三度と読むにつれて、時間をかけて一つの問題を粘り強く考えてこられた議論の奥行きに感心させられたことも事実である。とにかく、一つひとつの文体、表現に至るまで無駄がなく、そのおかげであまり

脱線することなく、ところどころ躓きはしたが、自らのことも重ね合わせながら、読み進めることができた。

本書は「自己変容」というテーマについて、著者が日常のなかで哲学している様子をわれわれに見せてくれている本である。まさに、著者が書きつつ考え、書きつつ変わる、そのつどの自己変容、そしてその記録、といったところだろうか。長年、西洋哲学（とりわけ、ヘーゲルの哲学）を研究されてきた蓄積と「臨床哲学」の展開のなかでかかわったフィールドでの経験や、人びととの出会いを通して考えたことを結びつけ、自己変容という事態に迫ろうとする意欲的な一冊であると言える。

本書の中心テーマである自己変容とは、われわれにとつて身近な経験である。年をとることやコンプレックスを受け入れること、そしてある言葉や著作に出会い、感銘を受け、考え方が変わるといったこと。また、近年注目されることの多くなった公共的な意思決定に市民がかかわることを目指すさまざまな試

みのなかで、参加者の考えや感じ方が変わる／変わったと言われたりもする。

ただ、著者の考える自己変容は、われわれが普通イメージする自己変容と少し異なる。その違いを三点ほどあげる。まず、ここでいう「自己」とは、イコール「自分」（人間）だけではない。著者によれば、もの（自然物や人工物）や組織（システム）にも「自己」はあり（ii頁）、「制度・組織・ひと」もの、自然などが運動して起こる自己変容」（二三頁）を見ようとしている。また、変容を理解する際、「Aが原因でBになった」というような、われわれにとつてわかりやすい枠組みにあてはめたり、われわれの目から見て「よい」「悪い」と価値づけしてしまったりということが多々ある。しかしながら、著者によれば、変容とは、要するに、「容」（かたち）が変わることであり、それ自体よいも悪いもない。そういう制約を少しのあいだ離れてみることを提案している。そして、最後に、「頑固さ」（八九頁）のような変わらなことも変容として、また、変わろうとしない意地や変わりたいくないという願望（五六頁）なども変容の契機として「自己変容論」の中を含めて考えている。

著者が自己変容に対してもつ視野は広く、さまざまな視点から「変容する」ということそのものに迫ろうとしている。

本書の内容

さて、本書を紹介するにあたり、まずは本書の流れを系統立てて概観したいところだが、さまざまな著作の引用、事例、授業の話、著者の経験などがパッチワーク的に入っているため、「一章では、二章では、……」という説明ではおそろくうまく伝わらないように思う。そこで、以下では、いくつかのポイントに絞って本書を紹介していきたい。

1 自分を中心からはずす

自己変容の哲学の中心にあるのは「自分を中心からはずす」というスタンスだ。本書を通して、そしてこれまでの著者の言動も含め一貫しているのは、自己同一性や普遍性、つまり「変わらないこと」前提とすることへの疑い、また、自分と他者、個人と社会、そして受動と能動といったものを区別してかかることへの疑いである。こうした態度は、いわゆる学問としての哲学と臨床哲学のスタンスの違いに言及する際にもうかがえる¹⁾。哲学とは、ある前提を根源に向けて問い直すという意味で、普遍性への志向をもち、また哲学が学問である以上、対象を捉え、理論的に支配しようとする。著者はそうした態度を「強い態度」と表現し、むしろそうではない「弱い態度」に身を置こうとしている。

自己変容に話を戻すと、自己変容の哲学は「自分論」ではない。では、「自分を捨てよ」ということなのかといえそうではない。また「他者論」なのかということもそうではない。あちらのことというよりは、やはりこちらのことを問題としている。パラダイム論で有名なクーン自身が経験した科学史記述についての回心の例（九八一〇一頁）がわかりやすいかもしれない。クーンが一七世紀の力学パラダイム（デカルトやガリレイ）の誕生の秘密に迫るため、取って代わられた古いパラダイム（アリストテレス主義）を理解しようとしていた時に、テキストの新しい読み方、アリストテレスの新しい理解に至ったという例だ。著者はここに二重の変容を見る。個別の科学的テクスト（アリストテレス）の読みという点での変容と、科学史家としての根本的見方そのもの、科学史家としての変容である。

ここでのポイントは、クーンが、なぜアリストテレスが力学では馬鹿げたことを述べるのかを自問する中で、現代人（つまり自分）にわかりやすい読み方を過去のテクストに適用するのではなく、あえて外したという点にある。また、別の角度から言えば、現代人（つまり自分）にとつてわかりやすい読み方と過去のテクストとのあいだにある「境界」⁽²⁾をまたぐ（あるいはゆさぶる）ことが変容へとつながっているという点である。

自分にこだわっているのは、変容は訪れない。対立や緊張をはらむ二項を分かち明確な「境界」のゆらぎが自己変容へと転化するきっかけとなりうる。他に取り上げられている事例を含め、

著者はこういう動きの中に変容を見ようとしている。

2 中動態

次に、注目したいのは「中動態」という考え方だ。中動態とは、あまり聞き慣れないが、古典ギリシア語などにあった文法用語で、「主体がただ一方的に働きかけるだけでも、一方的にされるだけでもなく、行為の結果が主体自身に返ってきて主体が変わる点に、特徴がある」（二二三頁）。英語やドイツ語でいう再帰動詞に近い。自己変容には、能動と受動の両方の様態がありうるが、著者によれば、「人間にとつて重要な多くの変容は中動態的」（二二三頁）であり、その例として宮沢賢治の「セロ弾きのゴーシュ」を取り上げている。

楽団で一番下手なゴーシュは、楽長にこきおろされ、帰宅して深夜まで練習する。そこに毎夜やってくるさまざまな動物たちに注文をつけられ（受動）たり、下手なチェロで動物に治療（チェロの振動があんま代わりになる）をもたらし（能動）たりするなかで、彼自身もチェリストとして成長し（中動）、わずかに一週間で「赤ん坊」の弱さを脱して、「兵隊」の力強さを身につける」（二二二頁）。

また、この中動態的あり方については、その後もヘーゲルの「主と奴」の議論、つまり、従属的で主体性を剥奪された奴が「苦悩」を持ちこたえているうちに、反転し、新しい主体性、自立性を獲得していく「主客反転」の物語なども使いつつ、そ

の重要性が強調されている。

つまり、この二つの例から見えてくるのは、自己変容のあり方が能動(態)と受動(態)という二分法では十分に捉えきれず、中動(態)という観点から見る必要がある、ということである。自分がかわることで相手も変わり、そしてその影響を被ることで自分も変わり、さらに両者の関係も変わっていく。受動と能動が相互に重なり合うプロセスのなかで、自己は変容していく。中動態は本書にとってもっとも核にあるキーワードであるとと言える。

3 臨床哲学

自己変容の哲学をおさえる上で、やはり著者がこれまで深くかかわってきた「臨床哲学」と切り離して語ることは難しいであろう。上に挙げた「自分を中心からはずす」ということ、「中動態」という考えも、やはりこれまでの臨床哲学の実践、「現場」とのかかわり、すなわち、動きながら考えてきたなかでたどり着いたアイデアであると思われる。また、これら二つは、「聴く」ことの方——臨床哲学試論(一九九九年)の中で鷺田清一が「哲学はこれまでしゃべりすぎてきた」と言ったこと、自らを聴く位置に置きつつも自らを他者に差し出すこととして「聴くこと」を位置づけたことと共通の観点でもある。

社会の「苦しみの現場」に、主に医療・看護・介護、そして教育の現場、もしくは問題にコミットしようとしてきた臨床哲

学(者)は、たとえば医療現場において、第三者的にかかわり、

その現場を中立的に記述するのではない。その記述の恩恵と影響に自らも浴する者として、医療現場にかかわる(一五八頁)。自分を変わらない者として「ニュートラルな立場」に置くのではなく、現場に、そして問題に巻き込まれる。そのなかで自分が変わり、自分が変わることで相手も変わる。そして、両者の「あいだ」そのものも変わり、両者を取り巻くその「場」も変わっていく。そして、……。この現場へのコミットという点で著者は「自動詞的に問うことを自らに許さないということが、臨床哲学者の臨床性の重要な一部だ」(一五九頁)とも言っている。

著者が「自己変容の哲学」ということで伝えようとしていることは、そのまま臨床哲学の実践と重なっている。

評者からのコメント

さて、本書を紹介するだけで、与えられた紙幅の多くを使ってしまった。まだ取り上げなければいけないキーワードもあり十分に汲み取れていない部分もあると思われるが、ひとまずここで区切りをつけ、以下では感想めいたコメントを二つ付け加えたい。

少し文脈は異なるかもしれないが、最初に読んだとき、頭に浮かんだのは看護系の非常勤先で私がよく取り上げる遷延性植

物状態患者とのコミュニケーション⁽³⁾という話だ。私たちは、コミュニケーションを考へる時、「自分」を起点として考へる。私が相手に対し何らかのメッセージを投げ、相手がそれを受け取る。そして相手が何らかの反応を示し、私がそれを受け取ればコミュニケーションの成立という具合に。それゆえ、メールを送つたのに返事がなければ「イラッ」とする。しかしながら、相手が遷延性植物状態患者であれば、何の反応も返つてこない。つまり、看護師のその患者に対する働きかけは常に一方的となる。では、この場面で、看護師はその患者とコミュニケーションをとつたことにならないのだろうか。もしも、コミュニケーションでないとすると「何」をしていることになるのか。相手の反応がなく、ただ一方的に働きかけるだけ、というのはなかなかしんどいことだ。それゆえ、筋肉のひきつりであつても、「笑つた」と解釈し、とにかく相手の中に、反応を探ろうとする。しかし、そうした態度はあくまでも「私」、つまりコミュニケーションができる人を中心にした考え(モデル)であり、相手にコミュニケーションの成立の責任を強いている。そうではなく、相手がいることに促されるような形で、私の行為が引き出されること、つまり、自分を出発点としないケアを考へてみる必要があるのではないか、ということを生徒と考へている。その意味で、著者の議論にはとても共感できた。

しかしその一方で、臨床哲学の本として読んだ場合、「もの足りない」とも感じた。著者自身「捉えどころがない」と断つ

ているので、その点は織り込み済みなのかもしれないが、大学という制度を通して臨床哲学にかかわつてきた者としては少し複雑である。著者はかつてより臨床哲学は武道の流派のように各自の流派をつくればよく、無手勝流でよいと言っている。そういう意味で、本書は中岡流臨床哲学だと言えらるう。著者が本書で紹介しているように、臨床哲学には多様な背景をもつた人がおり、多様な実践がある。著者は、主にヘーゲルを基礎として、臨床哲学の実践を考へているわけだが、そのやり方が「ヘーゲルは貴重な手がかり提供してくれる」(六頁)ということではないのか。また、本書で引き出された「自己変容」および「中動態」というアイデアは、臨床哲学の他の多様な実践に対してどういう意味をもち、それらの多様性が共有する「何か」になりうるのかどうか。さらに、しばしば応用倫理学や臨床倫理学との違いから臨床哲学が語られることがあるが、本書を介して、いわゆる哲学や倫理学をベースに社会の問題に向き合おうとしている人びとと議論できるのかどうか。肝心なところではかかされている感じがしてならず、もう少し明確な態度表明が欲しかった。

おわりに

本書はいわゆる哲学書ではない。著者が考へてきたこと、とりわけ、著者と父親とのかかわりの事例のように、長年「持ち

こたえ」、さまざまな事柄と結びつけつつ考えてきた思考の蓄積を、生煮えでもいいから、ある程度の確信のもとに綴った自己変容をめぐるエッセイだ、ということになる。この学会誌を手取る人であれば、おそらくなかなか手には取らない、取るとしても優先順位としては後の方となる本かもしれない。しかしながら、テキストとの対話、他者との対話、そして自分自身との対話を通して思考を紡ぎ出していくこと、また練り上げていくことが哲学の営みだとするならば、本書はまさに「哲学」の本である。共感するにせよ、批判するにせよ、各々のもつている「哲学」をさまざまな視点から眺める機会として、是非手に取ってほしい本である。

注

(1) 中岡成文「弱さの構築——死生の臨床哲学へ」、「死生学研究」特集号「東アジアの死生学へ」、東京大学大学院人文社会科学研究科(二〇〇九年)を参照のこと。

(2) 「境界」という言葉については、第二九回「臨床哲学研究会」(二〇一二年七月一五日開催)で行われた合評会で評者をされた村上靖彦氏の配布資料を参考にさせていただいた。また、当日の議論にも多くの示唆を受けている。なお合評会の様子は、大阪大学大学院臨床哲学研究室の紀要「臨床哲学」vol. 14-1でも読める。

http://www.let.osaka-u.ac.jp/cph/syuppan2_voll4_1.html
(二〇一三年二月二十八日確認)

(3) 「遷延性植物状態患者とのコミュニケーション」については、「交流する身体——「ケア」を捉えなおす」、NHKブックス(二〇〇七年)をはじめとする西村ユミさんの議論を引き合いに出しながら授業をしている。

(かしもと　なおき・大阪大学)